

年間第22主日
被造物を大切に作る世界祈願日

マタイ 16・21-27

高円寺教会 2017.9.3 9:30 ミサ
横浜教区末吉町教会主任司祭
濱田 ^{あきひさ} 壮久神父

まず、この説教の初めに、高円寺教会の主任司祭の吉池神父様に御礼申し上げます。ありがとうございます。実は、高円寺教会とわたしの縁ができたのも吉池神父様のお陰です。2003年の終わりに、当時東京カトリック神学院でモデラートル（養成担当司祭）をなさっていた吉池神父様が、神学生たちに「次にどこの教会にアポストライトス、司牧実習に行きたい？」ってアンケートを取ってくださったんです。その時、わたしは横浜教区の神学生で、横浜教区神学生が他の教区の教会へ司牧実習に行く例ってほとんどなかったんです。恐る恐る、吉池神父様に「東京の高円寺教会などいかがでしょうか？」と申し上げたら、「いいんじゃない」って言ってくださったんです。それで、2004年4月から2006年3月までの2年間、こちらの教会に週末ごとに司牧実習にお世話になっていた、という次第なんです。その頃のことを思い出すと、こうして自分が神父になって11年目、吉池神父様と一緒に祭壇を囲んでするのは感慨深いことと思います。司祭にとって、自分の世話になった司祭と共にミサができるというのは、これほど大きな喜びはないんです。

さて、今日、先程ミサの初めに申し上げましたように、フランシスコ教皇様が2014年からお始めになった「被造物を大切に作る世界祈願日」をお祝いしています。この祈願日は本来9月1日なんですけれども、日本の教会では9月1日って聖堂がガラガラになってしまうので、ウィークデイは皆さん来られませんか、お仕事とか、学校とか、いろんなことがあって。それで、日本の教会は9月第一日曜日にお祝いするように、となったわけですけども、何を大切にするのか。それは、一言で言うと、この地上に生きる全ての命あるものの中に、神はそこ自身を持っておられる美しさや素晴らしさ、その善性、美そして真理をお与えになっておられるのだということに気づきましょう、そして、そのことに感謝をしながら、このいのちを大切にしていくことを改めて決意しましょう、そういう日にして欲しいということを、フランシスコ教皇様は呼びかけているんです。わたしたちの日常の生活の中で考えてみると、例えば、今ここにいらっしゃる皆さんで、先週一週間、ご家族の皆さん、ご夫婦だったり

親子だったり、兄弟とだったり姉妹とだったり、一切心の中に「一体あの人は何を言ってるの？」とか思わずに過ごせた人ってどのくらいいらっしゃいますか？手を挙げなくて良いんですけど、心に問うてみてください。もし、フランシスコ教皇様が言うように、ひとつひとつのいのちの中に神の輝きが満ち溢れているのだという理解があったら、一瞬腹が立ってムツとしても、その相手の中にも神がくださったすばらしさがあるのだという点を深く味わうことによって、自分のその気持ちを乗り越える力というのも神からいただけるわけです。

今日の第一朗読の中でわたしたちが耳にした預言者エレミヤの証言、これは何を意味するのかなあと考えてみると、このすべてに超えて神はすばらしい美しい方であるっていうことを体験した人の証言なわけです。「主よ、あなたがわたしを惑わし、わたしは惑わされて、あなたに捕らえられました。あなたの勝ちです」。なんでこんなひねくれた言い方をするのか。それは、エレミヤが神の言葉、神がわたしたちの耳に何を語りかけてくださっているか、そのことを告げたときに、「あいつ、何をバカなことを言ってるんだ」と周りから笑い者にされ、嘲られ、不法な行いを受け、暴力を受けていたからです。だからこそ嘆いたわけです。でも、エレミヤはこうも言うわけです。「主の名を口にすまい、もうその名によって語るまい、と思っても、主の言葉は、わたしの心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がります」。神の言葉が自分の中で抑えきれないほどに燃え上がっている。このような体験をするわけです。

先程の話とつなげて考えるなら、もし出会う人一人ひとりの中に、特に一番身近な家族の中に、相手の中にもこのわたしが神から戴いたのと同じ素晴らしさ、美しさが映し出されているのだ、もしその思いが心から湧き上がって来れば、どんな人間的な意味でムツとした感情が起きても、相手に対する「あの人はだめだな」と思う気持ちが起きても、それを乗り越える力もまた、この神の言葉によって自分の内側から燃え上がってくる、そう言えるわけです。エレミヤは言います。「押さえつけておこうとして、わたしは疲れ果てました。わたしの負けです」。神などいないほうがいいのだと思いたいくらいひどい目にあっても、それでもしかし立ち上がろうとするこの力。

ちなみに、わたしが今居る末吉町教会は外国共同体がたくさんあるんです。今日も朝8時から中国語のミサが、中国人の神父さんが来て捧げられていましたし、また、午後には今日は第一日曜日ですから英語のミサでフィリピン共同体も集まるんです。その他にも、韓国語のミサがあったり、ミサはなくてもベトナムの共同体があったりするんです。このような国際化している教会の現実の中で、特に圧政の下にある、大陸から日本に来た中国共同体の信者たちは、日本で自由に神の言葉を互いに分かち合い祈ることができる、そのことにすごく開放感を感じています。そして、大きな喜びのうちに信仰生活を送っている。その姿を目の当たりにするとき、わたしはこのエレミヤの言葉は「ああ、本物

だなあ」と思うのです。

神に捕らえられ、神以外はわたしには見えないという、その信仰のあり方。そのことを、パウロはローマの教会に書き送った手紙で、このように指摘しています。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神のみ心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」。地上的なものの価値観の中に閉じ込められるときに、神の圧倒的な恵みの豊かさから目がだんだん逸れていってしまう、そのことをパウロは指摘しているわけです。「何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるか」、そのことが分かっただけですれば、最優先にすべきものが、どんなときでもブレることなく見えてくる。

それは、今日のマタイの福音書でのキリストの言葉にもはっきり現れています。ペトロは言います。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」。キリストが「受難の道を歩むよ」と宣言したときの言葉です。「苦しみを受けるよ」ということです。キリストはペトロに言います。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」。この言葉を今日のわたしたちの生活に当てはめるならば、人の評判、人からどう思われてるかとか、人からどう言われたとか、そのことに一喜一憂したり、確かに傷つくということは事実あったとしても、それで何か善いものを手放すとしたら、それほどもったいないことはないのだということをはっきりと見て取れるわけですね。

今日、このキリストの言葉、「神のことを思わず、人間のことを思っている」という言葉の反対側にある言葉、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」という言葉を私たちは受け取りました。苦しみは確かにあるかもしれない。困難もあるかもしれない。悩みも勿論あるかもしれない。でもその先に、この真実、神がわたしたちに与えてくださる恵みによって永遠の命への扉を開くことができたなら、そのとき、わたしたちは答えを知ることができるわけです。恵みに満ちた全てを超えて最も聖なるもの、美しいものが与えられるのだということです。その実現を信じ、わたしたちは今日もこの祭壇の前にいるわけですよ。

今日、是非皆さんと共に心に刻みたいなと思っているのは、ヨハネ・パウロ2世が強調したこと、つまり、「主の平和」というものは命の尊さの中に神の輝きを見る、そのことのできる人にとってまさに自明のこととなるのだということ。そして、被造物を称えると言うとき、その一つひとつの命の中にまさに主が与えてくださる恵みが満ち溢れ、その恵みと恵みを持ち合わせた人がお互い集まる中でキリストがおられることがわかると主の平和が実現するのだ、ということ。いわば、被造物を称えるということは、まさに平和を求めていくこと

と切っても切れないのだということを心に止めながら、このミサを心を合わせ
お捧げいたしましょう。